

## 文学博士山本達郎君の「安南史研究」に対する授賞審査要旨

本書は山本達郎君の安南史研究の第一冊で、序編、陳朝の王名に関する研究、第一編、元の安南征略第一章至第七章、第二編、明の安南征略第一章至第十章の三編より成り、元明兩朝の安南征略の顛末を明らかにしようとしたものであるが、それと共にこれによつてその以前の時代に於けるシナと安南との交渉史の研究についても、その基礎となるべき知識を得ることを目ざしたものである。特にこれ等兩朝時代を取上げたのは、この時代に属する研究史料が比較的豊富で、可なり詳細に史実を知り得ると考えたからである。

本研究の特色と認められることは、著者がシナと安南との史料を能う限り多く併せ用いたことである。シナの史料について遺憾無く搜訪の手を伸ばしたことは、全編に引用するところを通じてよく觀取し得られるが、それと共に從來我が国に於ては寓目することの出来なかつた安南の主要史書の近時我が東洋文庫などに收藏せられるに至つたものや、著者自から現地に於て搜求したものなどを精細に研究し、兩者を照合してその異同を明らかにし、その上に慎重穩当の批判を加えて史実の真相を捕捉することに努めた。その結果として、シナ側史料の偏重に依つては明らかでなかつた事が明確にせられたり（例えば元の安南征略の意義が直接安南の経略を目的としたことよりも、寧ろ占城を征服して南海経略の根拠を固めようとする計画に基因するものであつたことを証した如き）、從來信憑せられていたところが全く虚構の事実であつたことが認められたり（例えば明の世祖永樂帝が明に亡命中の安南の陳天平を、血統上陳朝正統の継承者としてその国に送還し、胡氏の新王朝を仆そうとしたことは明の実録にも明記してあることである

が、安南史料を精査すると、これは疑も無く明の策謀で、素性も知れぬ天平の世系を明の朝臣が偽造して、傀儡王を擁立しようとする企図に外ならぬと論断した如き)、また双方の記事の一致しない理由が明らかになって、新なる解釈を得るに至つたこと(例えば安南歴代の王名や世代について、シナと安南との所伝が互に異つていて、その關係を曖昧ならしめていたのであるが、著者は両史料を対比研究して、安南史料に見える王名はその諱であり、シナ側史料に見えるのは、陳朝の元・明に対する交渉の為に作つた特種の名であろうと考え、両者所伝の史実によつてこれを比定した上、後者が陳朝十三代と教えるのが正しいと論断した如き)などを始め、歴史地理や、史実の年次等に關しても發明したところ少くない。

従来主題に關連した個々の問題の研究されたものは内外に於て必ずしも少しとしないが、蒙古時代から明の宣徳時代安南の獨立するに至るまでの二百年近い間に亘つて、幾度も繰返された安南経略を、一篇の纏つた研究として發表したものは、本書を以て嚆矢とする。その成績は安南の研究に於て最も進歩を示している仏蘭西の學界に提示しても遜色の無いものである。